様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 26 年 6 月 22 日現在

機関番号：３７３０４
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２７２０１３８
研究課題名（和文）ドイツ民衆啓蒙運動による文化革命
――〈Volk〉と民衆文学の価値転換――
研究課題名（英文）The Cultural Revolution through the German Popular Enlightenment for the Public: The shift of value on “Volk” and folk literatures
研究代表者
田口　武史（TAGUCHI TAKEFUMI）
長崎外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：70548833

研究成果の概要（和文）：本研究は、18 世紀末のドイツで隆盛した「民衆啓蒙運動」を、知識人の Volk（民衆）観に決定的な変化を引き起こした思想運動として再評価するものである。R.Z. ベッカーをはじめとする民衆啓蒙家は、民衆の生活改善と国民意識醸成を目的として実践的啓蒙の普及を試みた。その活動は民衆の政治的・文化的重要性を多くの同時代人に認識させただけでなく、次世代のロマン派にも批判的に受け継がれ、彼らによる民衆讃美の一契機となっていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research revaluates the German Popular Enlightenment flourished in the 18 century as the thought movement which made intellectuals of the era change drastically on the way of understanding the crowd, or “Volk.” The scrutinize of data revealed that publicists, including R.Z. Becker tried to encourage the practical enlightenment, like improving the public living standards and enhancing the national awareness. This movement not only convinced the importance of the political and cultural commitment of the public, but also critically turned over the romantic school of the second generation. It could conclude that the German Popular Enlightenment acted as a crucial turning point to change the intellectuals’ value to praise the public.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	７００，０００	２１０，０００	９１０，０００
２０１１年度	８００，０００	２４０，０００	１，０４０，０００
２０１２年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
総　計	２，０００，０００	６００，０００	２，６００，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：民衆啓蒙運動、Volk、R.Z. ベッカー、啓蒙とは何か、市民、ドイツ・ロマン派、民衆文学、ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

(1)本研究は、グリム兄弟の伝承・民衆文学観の考察を発端としている。グリム兄弟に関する研究では、1990 年代以降、彼らによるメールヒェン収集・編集の背後に Volk（＝民族）意識と国粋主義を指摘し、その政治的姿勢を批判する見解が大勢を占めていた。しかしナチズムの刻印を帯びた二十世紀の Volk 概念で 19 世紀初頭のテクストを解釈するのは不当だと考えた研究代表者は、グリム兄弟

および民衆文学に携わったロマン派詩人たちが、著作中で Volk とその文化をどのように取り扱っているのかを検証する作業に取りかかった。

（２）その際、Volk という語が「下層民」、「民衆」といった被支配階級を指すと同時に、「国民」や「民族」という政治的、文化的共同体をも意味する点に注目した。一般には、18 世紀の啓蒙主義では否定的ニュアンスを込めて前者の意味で用いられ、19 世紀のロマン主義においては肯定的な後者の語義が前面に押し出されるようになったと説明される。また、この急激な価値逆転を引き起こしたのは、ナポレオンによる祖国占領に反発したロマン派だという解釈も定着している。

しかしそうだとするならば、ロマン派は自分たちドイツ人を称する語として、なぜ当時普通に用いられていた無難な国際語 Nation ではなく、あえて軽蔑的なイメージが付着した Volk を選択したのであろうか。この疑問を解き明かすべく、19 世紀から 18 世紀へと遡るかたちで民衆文学論の流れを辿った。

（３）その過程で研究代表者は、まさにフランス革命期のドイツに出現した「民衆啓蒙運動」Volksaufklärung と運動の主導者 R.Z. ベッカーを見出すに至った。民衆啓蒙運動は 18 世紀末に各界の知識人が取り組んだ実践的啓蒙の試みであり、農民を中心とする下層民の労働と生活を合理化することと、彼らに国民意識を植え付けることを主眼としていた。

その手段として講じられたのが、民衆向け生活指南書の出版であった。文字を読むことさえおぼつかない農民たちに対して、書物を所有させ、読ませ、実行させるには数々の工夫が必要となったが、ベッカーら民衆啓蒙家は、民衆向けの通俗本を模倣して、民衆の理解力や趣向に合わせた実用文学を作り上げた。最も成功した例であるベッカーの『農民のための救難便覧』（1788）はドイツ全土に普及し、18 世紀最大のベストセラーになった。

民衆啓蒙運動はしたがって、合理的世界観という啓蒙主義のエートスを基盤としながらも、民衆に国民としての帰属意識と共同体意識を求め、また民衆の世界にある種の関心を示している点では、ロマン主義とも共通する傾向を有していた。つまり民衆啓蒙運動は、時代的に啓蒙主義とロマン主義の中間に位置するだけでなく、思想的にも両者の特徴を兼ね備えていたのである。そこから〈Volk 概念の転換点は民衆啓蒙運動にある〉という仮説を立て、本研究をスタートさせた。

なお 18 世紀末に一世を風靡した民衆啓蒙運動は、19 世紀半ば以降はドイツ本国においても長らく忘れ去られていた。ようやく 1970 年代に再評価が始まり、社会史の分野を中心に年々関心が高まってきたのだが、文学研究において取り上げられることは依然として稀で、国内ではほとんど研究事例がない。

２．研究の目的

上記の仮説、すなわち啓蒙主義からロマン主義への移行期に発生した民衆啓蒙運動が Volk の概念を決定的に変化させ、同時に知識人が Volk に対して抱くイメージを否定から肯定へと反転させたという仮説を論証するのが、本研究の目的である。具体的には次の三点に焦点を合わせた。

（１）「ドイツ啓蒙主義全体における民衆啓蒙運動の位置づけ」：ドイツ啓蒙主義末期に巻き起こった〈啓蒙とは何か〉を巡る議論、市民階層による各種公益団体、教育改革、新聞や雑誌を介したコミュニケーションに民衆啓蒙運動の現象形態を調査し、この思想運動が発生し、拡大した背景と意義を指摘する。また民衆啓蒙運動が、ドイツ啓蒙主義の最高潮にして最終局面に現れた理由を考察する。

（２）「フランス革命前後の愛国心、文化ナショナリズムとの関連」：民衆啓蒙運動を、フランス革命前後における政治文化の側面から検証する。ドイツの啓蒙家が有していた国家観、社会観、それに基づいて提示された Volk 像、さらにはフランス革命が彼らの思想に与えた影響を明らかにする。その上で、啓蒙家とロマン派の政治意識を比較し、Volk を巡る両者の思惑が、民衆啓蒙運動を媒介として屈折しつつも連続していることを示す。

（３）「啓蒙主義からロマン主義にかけての民衆文学・文化論に与えた影響」：ロマン派の Volk 志向が民衆啓蒙運動に触発されていたこと証明するために、知識人たちの Volk 観を分析し、相互の影響関係および思潮の流れを跡づける。これを踏まえ、民衆啓蒙家およびロマン派が Volk と文学あるいは文化を結びつけた論理を読み取り、ドイツ近代において民衆文学の果たした、あるいは果たすことが期待された社会的機能を詳らかにする。民衆啓蒙運動というこれまで看過されてきた局面を文学史研究に導入することで、とりわけドイツ民衆文学の歴史を再構築する。

３．研究の方法

対象となる一次文献は、18 世紀後半から 19 世紀初めにかけて Volk に関して発言した知識人の言説に絞った。Volk の概念を決定づけたのは言うまでもなく民衆自身ではなく、発言の手段と能力を有していた知識人に限定されるからである。

この範囲内の文献において Volk と Nation を中心に、これに類する gemeiner Mann、der gemeine Haufe などの語が、誰を指し、そこにどのような含意があるか、また各語がどう使い分けられているかといった点を、個別の文脈を重視しつつ詳細に分析した。また Bürger や Mittelstand、der Aufgeklärte、

der Gelehrte、Publikum といった市民階級や知識人を指す語とも対比させながら語義を検討した。こうした文献学的手法を用いたのは、それぞれに社会的立場や利害関係を抱えた知識人の（従来の文化史的切り口では見えてこなかった）本意や心的変化を追及するためである。

ただし Volk が「国民」を、Nation が「国家」を指す限りは、当該の政治単位の地理的、理念的範囲を事実に即して正確に把握しておくことも不可欠である。そのため、当時の政治情勢、社会背景、文化事情、とりわけ啓蒙と国家政治、啓蒙と市民社会・身分社会、メディアとコミュニケーション形態の変化を同時代の新聞や複数分野の二次文献によって確認した。

このように、思想家や詩人のテクストから抽出される思想と、その現実的背景となる出来事を照らし合わせることで、民衆啓蒙運動の展開と影響を多面的に浮かび上がらせるとともに、その思想史ならびに文学史における位置づけを明確にすることを目指した。

４．研究成果

（１）「民衆啓蒙運動と知」：学識よりも実践を重んじた民衆啓蒙運動は、知のあり方を変革する試みであった。この観点からカントやメンデルスゾーンら第一級の知識人たちが関与した〈啓蒙とは何か〉の議論を再検討した結果、ベッカーの民衆啓蒙運動との連関が新たに見いだされた。

①〈啓蒙とは何か〉：カントは公衆における自由こそ啓蒙の存立基盤であると訴えた。彼がこのように主張したのは、当時の言論界で、民衆向けの出版に関して消極的な意見が出るようになっていたからである。

すなわち知識人たちは、ベッカーによる万人を対象とする啓蒙の試みを受け、民衆啓蒙の必要性とその手段として出版物を用いることの是非を巡って、「ベルリン水曜会」およびそのメンバーが深く関与していた「ベルリン月報」を舞台として――カントの論文「啓蒙とは何か、という問いへの回答」はこの「ベルリン月報」に発表された――盛んに意見を交わしていた。その際彼らの多くは、出版物が人心を撹乱することを恐れ、著述家自身による自己検閲が不可欠だと主張したのである。こうした反動的な見解に対抗して、カントは啓蒙家自身が啓蒙を阻害する危険性をいわば内部批判として指摘し、出版物を介した「公的な/公開の」議論を要求したのである。〔→雑誌論文③〕

②「クニッゲの啓蒙家批判」：クニッゲは主著『人間交際術』において辛らつな同時代批判を展開した。とりわけ、啓蒙家を自認する人々に対する激しい攻撃が注目に値する。なぜなら、クニッゲ自身が啓蒙主義の代表的論客と目されてきたからである。

そこで本研究では、啓蒙主義に対する彼の批判が何を意味しているかを検討した。『人間交際術』においてクニッゲが提示した「真の啓蒙」とは、生活に直結した実用的知識を民衆に与えることであった。すなわち彼の理想とする啓蒙のあり方は、民衆啓蒙運動とまったく軌を一にしているのである。従来の研究で看過されてきたクニッゲと民衆啓蒙運動の関連が、ここに指摘される。なお、クニッゲとベッカーは秘密結社の活動を通して接触した可能性があり、今後この観点から研究を進めてゆく。〔→雑誌論文②〕

（２）「民衆啓蒙運動とナショナリズム」：ベッカーが 19 世紀の新しい政治状況の中で急速にナショナリズム傾向を強めてゆく過程を跡付けた。民衆啓蒙運動ははじめから人道的動機と政治的動機とを併せ持っていたのだが、フランス革命以降は政治的動機へと重心を傾けるようになった。ところがベッカー自身は、民衆の愛国教育を社会の混乱から彼らを救い出す人道的手段と認識していた。それゆえ彼は躊躇することなく、民衆解放よりも秩序維持を優先させ、Volk を下層民のみならずドイツ人全体に拡大解釈した上で、包括的な愛国教育に邁進した。

その後彼は、フランスによるドイツ占領を独裁政治による啓蒙主義の侵害と批判し、自らが編集発行する新聞で抵抗を試みたが、フランス軍の手で逮捕監禁されてしまう。この体験を記した著作において、彼は言葉の端々で自尊心を傷つけられたドイツ人としての恨みを滲ませている。注目すべきことに、まさしくそうした発言の中に、Volk の過去に寄せる愛着やその起源への関心といったロマン派と共通する志向が見出された。民衆啓蒙運動は、時代状況に対応してゆく内に、いつの間にかロマン主義と同じ方向性を持つことになったのである。〔→雑誌論文③、学会発表②、③〕

（３）「民衆啓蒙運動とロマン派」：ロマン派詩人は民衆啓蒙運動の俗人性に激しく反発し、独自の Volk 観に基づく文学を提唱した。新旧二世代の共同体意識、歴史観の差異が目立つが、両者の接続関係や共通する志向も過小評価してはならない。民衆啓蒙運動は初めて知識人に Volk の政治的重要性を知らしめ、ロマン派はその動きを批判的に受け継ぐかたちで自らの Volk 像を構想した。両者は対立しつつも、Volk に対する知識人の積極的関与という点において連鎖している。

①J. ゲレスは、ベッカーと同様に反ナポレオンの論陣を張った。彼はフランス革命勃発から約 10 年間、革命思想の普及と共和政体の実現を目指して言論活動を展開した。従来の

研究では、その主張をもっぱらカントの政治論と世界市民思想に基づくものと見なしてきた。しかし市民階級が国家の担い手として民衆を啓蒙することで政治的難局を切り抜けるべきだというゲレスの提案は、ベッカーが民衆啓蒙運動でおこなおうとしていたことと完全に一致している。後にロマン派の中心人物となるゲレスが、実は民衆啓蒙の思想系譜に連なっていることが確認される。〔→学会発表①〕

②以上の考察から、民衆啓蒙運動が「下層民」としての Volk から「民族」としての Volk という概念の転換を引き起こし、それがきっかけとなってロマン主義の Volk イデオロギーが生まれてきたという結論に達した。

民衆啓蒙運動は知識人たちを刺激し、啓蒙の実践方法に関する広範な議論を巻き起こした。たしかに書物によって農民の意識改革をおこなう試みは、さしたる実績を上げることなく終わる。しかし対照的に、万人を対象とした啓蒙とその手段たる「啓蒙的民衆本」の革新性は、次第に啓蒙の担い手たちの圧倒的な支持を得るようになった。しかもフランス革命後の政治的危機においては、Volk の国民化を促し、国家の求心力を高める愛国運動として、さらに重視されるようになった。それまで知識人の視界にほとんど入っていなかった Volk が、世紀転換期に突如として時代の核概念となったことは、民衆啓蒙運動の影響を抜きにしては十分説明できない。

こうした前史を考慮に入れると、ロマン派が Volk に強い関心を抱いた一つの必然性が見いだされる。ロマン派の中心人物であるゲレス、ブレンターノ、そしてアイヒェンドルフは、いずれも民衆文学の再興について語る際にベッカーの著作を名指しで攻撃している。つまりロマン派は、民衆啓蒙運動が社会に広めた新しい Volk 像と対峙し、それを克服する試みを通して独自の Volk 像と民衆文学論を構築していった。ロマン派による Volk 賛美には民衆啓蒙運動のアンチテーゼという側面があったのである。

フランス革命が Volk の政治的・文化的意義を一気に押し上げたのだと解釈することは、もちろん間違いではない。しかし民衆啓蒙運動が革命以前に Volk の価値転換を図っていなかったならば、ロマン派はフランスへの抵抗とドイツ人の結束を訴える際の合い言葉として Volk を用いえたであろうか。彼らがドイツ人としてのアイデンティティーをこの語に仮託できたのは、民衆啓蒙運動を通して民衆の政治的・文化的重要性が知識人層に認識され、肯定的イメージを帯びるようになっていたからに他ならない。〔→図書①〕

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 田口武史、R.Z.ベッカーのフランス革命批判、長崎外大論叢、査読無、16 号、2012、87-99
② 田口武史、クニッゲ『人間交際術』における啓蒙批判と実用志向――R.Z.ベッカーの民衆啓蒙運動と比較して――、九州ドイツ文学、査読有、24 号、2010、1-18
③ 田口武史、カント「啓蒙とは何か、という問いに対する回答」における“Publikum”、西日本ドイツ文学 、査読有、22 号、2010、17-29

〔学会発表〕（計 3 件）
① 田口武史、J. ゲレスとフランス革命――「世界市民」から「民族」への移行過程――、第 61 回日本独文学会中国四国支部研究発表会、2012 年 11 月 10 日、広島大学
② 田口武史、1790 年のドイツ新聞、第 63 回日本独文学会西日本支部研究発表会、2011 年 11 月 4 日、熊本大学
③ 田口武史、R.Z.ベッカーの獄中記、第 24 回九州大学独文学会研究発表会、2010 年 5 月 1 日、九州大学

〔図書〕（計 1 件）
① Takefumi Taguchi: Aufgeklärte Volkskultur ――Der Funktionswandel der Volksliteratur durch R.Z. Beckers Volksaufklärung――. In: Ryozo Maeda (Hg.): Transkulturalität - Identitäten in neuem Licht. München 2012, 206-211.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
なし

○取得状況（計 0 件）
なし

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
田口　武史（TAGUCHI TAKEFUMI）
長崎外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：70548833

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし